

中国社会科学学会 2024年度大会

会場：東京大学文学部1番・2番大教室（法文2号館2階）

主催：中国社会科学学会 Tel:03-5841-3746, 大会専用E-mail:shabun.taikai@gmail.com

参加費（シンポジウム資料代）1,000円

2024年7月6日（土）自由論題研究報告

第Ⅰ会場：13:50～16:20 2番大教室 司会：伊東 貴之（国際日本文化研究センター）
『夷堅志』から見る宋代士人の占い活動とネットワーク ……………王 世禎（大阪公立大学）
コメンテーター：水口 拓寿（武蔵大学）
至元年間における道蔵焚経の再考——その実情と対象をめぐって……………孔 詩（東京大学大学院生）
コメンテーター：柳 幹康（東京大学）
明代初期における開封府の遊女業と朱有燉「遊女劇」の成立 ——遊客への勸誠意識を中心に
……………温 彬（大阪大学大学院生）
コメンテーター：大木 康（東京大学）

第Ⅱ会場：13:00～16:20 1番大教室 司会：川島 真（東京大学）
近代中国における服飾の改良——東アジアの視点から考える
……………劉 玲芳（日本学術振興会特別研究員PD・東京大学）
コメンテーター：中村 元哉（東京大学）
「社会の罨」を如何に脱出するか——魯迅改訳作品「哀塵」における問題関心
……………黄 嘉慶（東京大学大学院生）
コメンテーター：谷 行博（大阪経済大学）
モダニズム作家における革命の表現様式——穆時英「蒼白的彗星」を手がかりとして
……………冉 念周（一橋大学大学院生）
コメンテーター：王 欽（東京大学）
戦後新制東京大学Eクラスの草創期における中国語をめぐる主体的な実践 ……温 秋穎（大谷大学）
コメンテーター：佐藤 慎一（東京大学）

会員総会：17:00～17:30 1番大教室

2024年7月7日（日）

シンポジウム 惑星時代の中国学（Sinology in the Planetary Era）

共催：東京大学東アジア藝文書院

1番大教室 10:00～16:30

モデレーター：石井 剛（東京大学）

趣旨説明：10:00～10:10

基調講演：10:10～12:00

儒家的関係主義を止揚する：新たな惑星倫理に向かって ……………ヤナ・ロスカ（リュブリャナ大学）
乗り越えられないもうひとつの近代中国：東アジア儒者からの視点……………楊 儒賓（国立清華大学）

個別報告：13:15～15:15

中国学と普遍性 ……………橋本 悟（ジョンズ・ホプキンス大学）
マレーシア・シンガポール儒家の越境と宗教対話——歴史と今日の危機からのチャレンジへの応答
……………魏 月萍（スルタン・イドリス教育大学）
スペンサーとグローバルな知の流動における近代中国思想
——『原道：章炳麟と両洋三語の思想世界（1851-1911）』のコンテクスト…彭 春凌（中国人民大学）
コメンテーター：志野 好伸（明治大学）・王 欽（東京大学）

総合討論：15:30～16:30

*講演はいずれも通訳あり

◆自由論題研究報告 7月6日(土) 第I会場:13:50~16:20 2番大教室

◇『夷堅志』から見る宋代士人の占い活動とネットワーク

王 世禎

〔報告要旨〕宋代においては、占いが一層発展し、当時のエリート階層である士人の日常生活にも深く浸透してきた。本報告は術士(占い師)と占いが、士人の交遊とネットワークの構築において、いかに位置づけられるか、また、いかなる役割を有するものかを明らかにしたものである。従来の研究では、士人が占いに頼る心理状態と士人が占いに夢中になった原因が多く検討されてきたほか、士人と術士の交流に焦点を当て、彼らの関係性が検討されてきたが、占い自体が宋代士人の交遊にどう位置付けられるのかについては十分に研究されていない。そこで報告者は『夷堅志』に記された士人の占い活動の事例を取り上げ、占い活動の詳細や、士人たちが共同で行った占い活動に参加する士人たちの関係性を考察した。以上の分析・考察によって、以下の内容が解明された。占いを生業とする術士は、複数の士人の交遊圏に出入りするため、一定程度に情報伝達の機能を果たしている。士人の交遊は依然として、学縁、業縁、血縁などに基づいて行われ、術士は単に士人が交流する際の話題や交流の媒介として現れる。また、占い自体は同じ交遊圏の士人を結びつけるに接着剤の役割を果たしていると言える。

〔報告者紹介〕王世禎(おう・せてい)、1991年生。専攻は宋代史。大阪市立大学文学研究科後期博士課程修了、博士(文学)。現在大阪公立大学都市文化研究センター・研究員。主要論文「宋代茶館研究の現状と課題」(『人文研究』第69巻、2018年)、「南宋臨安茶館的形態及其分布」(『人文研究』第72巻、2021年)、「从宋代士大夫的书信与赠答诗看赠茶文化」(『都市文化研究』第24号、2022年)など。

◇至元年間における道蔵焚経の再考——その実情と対象をめぐって

孔 詩

〔報告要旨〕十三世紀前半、モンゴル統治初期の漢地統制に際し役割を果たした全真教は、仏寺を占領して道観に変えさせたり、仏教を弾圧する書物を流布させたりすることによって、仏教との対立を深刻化させた。一方、中央政府による政治方針の変動にともない、憲宗と世祖の二朝に跨って、数回の宮廷道仏討論会が開催され、おおむね道教側の敗北と判定された。『元史』や仏書『大元至元弁偽録』などによると、至元十八年に举行された最終回の討論会の裁定を受けて、道蔵に収められている老子道德経以外の経典のすべてが焚書されたという。ただし、多数の先行研究で指摘されているように、そもそもの焚経の有無から、その対象となった道教経典の範囲に至るまで、一連の疑問が残されたままとなっている。

本報告では、焚経が行なわれたとされる時期と近い元明期を対象とし、この時代の人々の言論記述を通して、焚経の有無やその対象、また実際の遂行状況について検討する。

〔報告者紹介〕孔詩(こう・し)、専門は道教思想史、主にモンゴル帝国期における道教と仏教の関係史。東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了。現在東京大学大学院人文社会系研究科博士課程。主要論文「江南仏教総撰楊璉真伽の道教に対する弾圧とその影響」(『東方宗教』142号、2023年)。

◇明代初期における開封府の遊女業と朱有燾「遊女劇」の成立 ——遊客への勸誠意識を中心に

温 彬

〔報告要旨〕本報告は、明代初期の劇作家である朱有燾(1379-1439)の「遊女劇」を対象にする。今までの先行研究では、彼のこのような作品が女性の貞節観を励ますことに焦点が当てられてきたが、その中に含まれる遊客への忠告にはあまり注目されていない。元代の同様の作品とは異なり、朱有燾の遊女劇は多くの遊客へ

の忠告と勸誡が満ちており、これは彼の作品の特徴の一つとは言える。本報告は、明初の開封府での遊女業の発展状況と、朱有燉自身が地元の遊女とどのように関わっていたかを視点にして、その劇中の遊客への勸誡意識の形成の社会的歴史的背景を検証し、これを通じて朱有燉の遊女劇の性格を再評価することを目的とする。

〔報告者紹介〕温彬（おん・びん）、1993年生。専攻は東アジア伝統演劇論。北京中央戯劇学院戯劇文学系、大阪大学文学研究科演劇学専攻博士前期卒。現在大阪大学文学研究科演劇学専攻博士後期課程在学。主要論文『世阿弥「物まね」論における「心」の性格：中国伝統演劇論「曲学」との関連から』（『演劇学論叢』20、2021年）『朱有燉の「恋愛劇」の教化意味—戯曲『復落娼』『香囊怨』『団円夢』を手掛かりに—』（『フィロカリア』41、2024年）など。

◆自由論題研究報告 7月6日（土）第Ⅱ会場：13:00~16:20 1番大教室

◇近代中国における服飾の改良——東アジアの視点から考える

劉 玲芳

〔報告要旨〕19世紀後半、近代化を目指す中国では、様々な分野での改革が求められた。その中で、人々の日常的な服飾文化においても同様の動きが見られた。日清戦争の前、中国は隣国である日本や朝鮮の服飾の変化に大きな関心を寄せたが、これは主に軽蔑や嘲笑の対象であった。しかし、日清戦争後、清朝末期の中国でも服飾の改良に向けた取り組みが始まった。本研究は、近代中国（清朝末期から中華民国初期にかけて）における服飾改良に焦点を当て、その起源と発展の過程を明らかにすることを目的としている。東アジアの視点から、中国における服飾改良の意識がいつ、どのようにして生まれ、隣国の服飾変化からどのような影響を受けたのかを考察する。研究方法としては、19世紀末から20世紀初頭にかけての雑誌や新聞記事、その他の一般的な文献資料、ビジュアル資料を総合的に分析し、近代中国における服飾改良の全体像を解明する。

〔報告者紹介〕劉玲芳（りゅう・れいほう）、1990年生まれ。大阪大学日本語日本文化教育センターで博士号を取得。日本学術振興会特別研究員(DC2)および大阪大学日本語日本文化教育センター特任助教を経て、現在は日本学術振興会特別研究員(PD)として東京大学東洋文化研究所に所属している。著書・論文には、『近代日本と中国の装いの交流史』（単著、大阪大学出版会、2020年）、『異服新穿』（前述単著の中国語版、中国社会科学文献出版社、2023年）など計18本の論文がある。

◇「社会の畏」を如何に脱出するか——魯迅改訳作品「哀塵」における問題関心

黄 嘉慶

〔報告要旨〕早期魯迅の思想、あるいは「魯迅」として文壇に登場する以前の周樹人の思想を研究する際、1904年以降の経歴にその原型を求める傾向がある。これは1904年以前の魯迅に関する資料の不足が原因であり、魯迅の翻訳作品と魯迅思想との関わりがあまり注目されていないことも一因と考えられる。しかし、晩清期においては、魯迅を含め、翻訳者が外国作品を翻訳する際、所々添削を加え、自分の思想を表出しようとするところがある。そこで本報告では、1903年魯迅の改訳作品「哀塵」における改編、加筆及び圈点を分析することにより、「哀塵」の重層的構造を明らかにする。それに基づいて、「哀塵」における魯迅と『浙江潮』編集者の問題関心の異同を分析し、「哀塵」と以降の魯迅思想の展開とのつながりを検討する。

〔報告者紹介〕黄嘉慶（こう・かけい）、1994年生。専攻は中国近代文学、魯迅研究、章炳麟研究。現在東京大学人文社会系研究科博士課程在学。主要論文「章太炎早期札記中の「西学」問題」（『現代中文学刊』、2022年第2期）など。

〔報告要旨〕中国モダニズム作家の革命に関する叙述は常にイデオロギー上の欠如、社会の構造に対する認識の不足等の点からの批評が伴う。それは中国モダニズム作家と呼ばれる者たちにとって、「正確な」表現形式が明確になっていないことが関わっているであろう。本発表は、革命者の生活を描いた穆自英の作品「蒼白的彗星」(1935、全集に未収録)を取り上げ、同氏による作品「PIERROT」との比較を書き方や内容の類似点から分析し、この二つの作品で共有される「革命と個人生活の齟齬」という問題を示そうとするものである。加えて、同時期の左翼作家の作品と比較することを通して、20年代末から30年代初頭における革命叙述の文脈のなかに、「蒼白的彗星」を例とした穆時英の革命叙述を位置づけることを目指す。それは、穆時英のようなモダニズム作家がいかに20、30年代という時代状況と言語空間で彼らなりの革命の表現様式を探したかを解明する試みでもある。

〔報告者紹介〕冉念周(ぜん・ねんしゅう)、1994年生。専攻は1920、30年代の中国モダニズム文学。現在一橋大学大学院言語社会研究科博士課程在学。主要論文「方法としての借用：穆時英の作品における池谷信三郎の「橋」について」(『言語社会』第15号、2021年)、「時間と共に変化するテキスト：穆時英「謝医師的瘋症」と「白金的な女体塑像」の比較」(『野草』第109号、2022年)など。

〔報告要旨〕本稿は、戦後の新制東京大学に新設された中国語を第2外国語の必修科目とするEクラスを研究対象とし、1950年代末までの草創期のEクラスで行われた中国語をめぐるさまざまな主体的な実践、及びそれらの実践の意義を考察しようとするものである。このような主体的な実践は、戦前の「支那語」教育と学習の様式を反省し変革しつつ、さらに戦後のアメリカ式の語学教育とも一定の距離を保っており、語学学習の到達点について独自の論理を発展させるものだった。本稿は具体的に以下の角度から草創期のEクラスにおける主体的な実践を考察する。第一に、アメリカ式の中国語教育と距離を取った専任講師・工藤篁の教授法と教育理念。第二に、課外の集団活動における学習者の主体性の喚起と教師の権威性のゆらぎ。第三に、Eクラスの主体的な実践を支えていた中国理解ないし中国研究のための語学学習の価値観の問題。

〔報告者紹介〕温秋穎(おん・しゅうえい)1995年生。専攻は人文社会情報学、メディア史。2024年京都大学大学院教育学研究科博士後期課程終了、博士(教育学)。日本学術振興会特別研究員DC1を経て、大谷大学国際学部国際文化学科任助教。主要論文「〈声〉の中国語受容の文化史研究—もう一つの教養語をもとめた近代日本」(博士論文、2023年に京都大学大学院教育学研究科に提出)など。

シンポジウム
惑星時代の中国学
(Sinology in the Planetary Era)

2024年7月7日(日) 10:00~16:30 1 番大教室

企画の趣旨

中国語の世界において、Sinology は「漢学」と表現して一般的には海外中国研究の総称として使われている。その意味では、本学会もまた日本において Sinology=漢学を担っているということが可能だろう。グローバル化が進む今日、「中国」内外の境界はもはや自明であるとは言えない。わたしたちはまさに「中国」のグローバル化を経験している。つまり、わたしたちの研究は、実際において、境界の開かれた「中国」なるある種の実体が生成変化するダイナミックなプロセスに不可避的に関わってしまっている。こうした前提のもとで、Sinology=漢学の運動は、「中国」の未来像に向かって創造的に関わっているのだと言える。

今日、グローバル化は新しい段階に入っている。ハンナ・アレントが『人間の条件』のなかで予示しているように、人類が地球を離れて別の星に移住することはすでに荒唐無稽であるとは言えなくなっている。ガヤトリ・スピヴァクはポスト・コロニアル理論の視点から「惑星性 (planetary)」によって近代の問題に向き合おうとしている。さまざまなグローバル危機は、わたしたちの学問を反省的に捉え直すヒントが彼女たちのこうした惑星的想像に含まれていることを示している。そうであるならば、わたしたちの Sinology=漢学は、そうしたグローバルな学問的、思想的環境の下でどのような役割を果たすべきだろうか。Sinology=漢学の角度から惑星的視野における今日の危機意識に対して何らかの応答をすることは可能だろうか。

このシンポジウムでは、こうした認識に立って、Sinology=漢学を近代以来のグローバルなダイナミズムのなかに置き直し、惑星時代におけるそのあるべき未来について共に考えたい。

報告要旨

儒家的関係主義を止揚する：新たな惑星倫理に向かって
(Sublating Confucian Relationism: Towards A New Planetary Ethic)

ヤナ・ロスカ (リュブリャナ大学)

今日、わたしたちはグローバル化の時代のただなかで、グローバルな規模で協力しながら解決すべきグローバルな危機にさらされている。その結果、わたしたちはいわゆる「基礎づけとしての個人主義 (foundational individualism)」に根ざした考えやイデオロギーに基づく既存のリベラルな政治システムを際限なく拡張していくばかりではいられなくなっている。この報告では、西洋の学术界ではまだまだ探求されていない儒学的関係倫理を統合することによって、グローバルな倫理の言説を豊かにすることを主張する。そして、グローバルからプラネタリーへと対話を引き上げ、わたしたちの倫理に関する理解やアプローチを広げることを目指す。今日広まっている倫理原則はヨーロッパの啓蒙的価値観に根ざしており、ヨーロッパ中心主義がそこには反映されている。しかし、それらは棄てられるべきものではなく、むしろ儒学的倫理と統合されながら豊かにされるべきものである。この統合のためには、いまある倫理的なフレームワークと儒学的モデルの弁証法的な交換が必要であり、そのためには、文化横断的な (ポスト) 比較哲学への新しいアプローチを導入しなければならない。それをここでは「止揚的方法 (method

of sublation)」と呼ぶ。この方法論は、いまある倫理的パラダイムに取って代わろうとするものではなく、より包摂的かつ包括的な倫理的対話に訴えることでそれらを拡張しようとするものだ。もうひとつの倫理的モデルを組み入れることを通じて、本報告はより多様な文化的な視座や諸伝統に適応できる豊かな対話をはぐくみ、そうすることで世界倫理に関するより細微にわたる理解のために貢献しようとするものだ。

キーワード：グローバルな倫理、プラネタリーな倫理、儒学的関係主義、止揚、ヨーロッパ中心主義

乗り越えられないもうひとつの近代中国：東アジア儒者からの視点

（躍不過的另類現代中國：一種東亞儒者的視野）

楊儒賓（国立清華大学）

20世紀中国では2度の構造的な政治革命が起こった。一度目は1911年の辛亥革命だ。年をまたいだ元旦に中華民国が南京で成立する。もう一度は1949年の共産主義革命だ。この年10月1日、中華人民共和国が北京で成立する。20世紀後半以降、国際漢学の世界では「中国」をめぐる考察は概ね北京政権によって代表されていた。辛亥革命の産物としての中華民国はあたかも歴史的名辞になってしまったかのようだった。だが、近代的転換の視座から20世紀中国の政局変化を見るならば、1911年の辛亥革命と1949年の共産主義革命は、それぞれ別の中国近代化想像を代表している。報告者は前者を「混合型近代化プロジェクト（混合式現代化方案）」、後者を「共産主義的近代化プロジェクト（共産主義的現代化方案）」と呼んでいる。この講演では、20世紀の海外新儒家ならびに日本の二人の漢学研究者である島田虔次と溝口雄三の論点を援用しながら、中国の近代化プロセスには中国の伝統的DNAが含まれており、辛亥革命の申し子としての中華民国の理念は中西ふたつの近代化思潮が合流した結果生まれたものであると見ることができ、その構造のなかには地域的な制限を超えた宇宙的視点があるのだと指摘する。「中華民国」は、方法として、現代中国にとっていまでも極めて大きな意義があるのだ。

中国学と普遍性

橋本悟（ジョンズ・ホプキンス大学）

21世紀において、人文学のいわゆる「グローバル化」はますます進展しつつあるように見受けられる。しかし文学・哲学といった伝統的なディシプリンから、メディア研究・エコクリティシズムなどの比較的新しい分野にいたるまで、中国学（あるいは一般に非西洋を対象とした学問）が、人文学の普遍性をいかに発展させてゆくべきかという根本的な問題が広く共有されているとは言い難い。それどころか、この問題を論じる際、“特殊性”対“普遍性”といった極めて18世紀ヨーロッパ的な問題設定が蒸し返されることもしばしばである。発表者は近著で、近代的意味における「文学」の東アジアにおける起源について調べながら、それがまさに古代と近代とのあいだの関係性を批判的に再構築しようとする営みとして発生したことを論じた。本発表ではこの議論を紹介した上で、それが人文学の普遍性を考える際にどのような理論的示唆を与えるのかについて検討してみたい。その際、概念の流通において文学性が果たす機能に着目し、それを可能世界間のコミュニケーションの問題として捉え直すことで、問題提起を試みたい。

マレーシア・シンガポール儒家の越境と宗教対話—歴史と今日の危機からのチャレンジへの応答

（馬新儒家的跨際與宗教對話——對歷史與當下危機挑戰的回應）

魏月萍（スルタン・イドリス教育大学）

マレーシア・シンガポールに儒家文化が伝播した初期において、エリートと世俗という二つの階層が存在していたことは見逃すことはできない。19世紀の初め、シンガポール領事館が推し進めた文化活動の多くは儒家思想を発揚するものだったが、それは、知識人層に限定されていた。そのころ、民間では孔子

祭祀の活動が盛んに行われ、そこでは世俗的な儀式が重視され、儒家の宗教的性格が加わることになった。孔子は道徳や倫理の価値を示す先聖となっただけではなく、人々の幽微な精神と心理の支えとなったのだ。1980年代にはシンガポールで儒家運動が巻き起こった。儒家の倫理は他の宗教と手を取り合いながら、西洋の歪理に対抗することになった。しかし他方では、孔子は道教や民間信仰の神祇体系に組み込まれ、孔子と宗教は融合体となった。1990年代末になると、マレーシアで「回儒対話」が提唱され、儒家はグローバル文明の価値観として、マレー・ムスリムのコミュニティに紹介されるようになった。そして、思想横断的、言語横断的な交流が展開されたのだった。こうしたロングスパンの歴史から見ると、「マレーシア・シンガポールにおける儒家」は早い段階から「越境」(跨際、Cross-border)的な思想と言語の実践だったことがわかる。エリートから世俗の民衆へ、思想から宗教へ、さらには「中華-マレーシア」(華-馬)の文化思想横断的な翻訳へと、エスニック・グループや言語を横断する特質が鍛えられていったのだ。本報告では、マレーシアとシンガポールの儒家による越境と宗教対話について検証しながら、歴史と今日の危機からのチャレンジ、とりわけ、日増しに激しくなるばかりの宗教主義やエスニシティ主義に対して、儒家による越境と相互融和の思想がどのようにして新しい思想的秩序や倫理的想像を提供し、さらには多元的、包摂的、寛容かつ調和的な社会思想の空気をつくり出しうるのかについて考えてみたい。

キーワード：マレーシア・シンガポール儒家文化、儒家倫理、回儒対話、越境、宗教的性格

スペンサーとグローバルな知の流動における近代中国思想

——『原道：章炳麟と両洋三語の思想世界（1851-1911）』のコンテクスト

(斯賓塞與全球知識流動視野中的近代中國思想

——《原道：章太炎與兩洋三語的思想世界（1851-1911）》的一條脈絡)

彭春凌（中国人民大学）

イギリスの哲学者ハーバート・スペンサーの進化哲学は人類の感得できる範囲内の宇宙の進化、ヒトの誕生から人類文明の進歩と発展に至るあらゆる対象に対して、総合的かつ確定的な解釈を与えた。スペンサーの進化論は近代中国で次第に流行し、思想家章炳麟の戊戌変法時代における文化観の基礎となった。1880年代、独占資本主義の勃興と共に、スペンサーの自由放任主義は厳しい疑義を呼ぶことになった。心理的要素と人間の主観的能動作用を強調して英米両国で新しく興った社会学はスペンサーの「静的」社会学を批判した。ドイツやアメリカの勃興は、知のグローバルな伝播を含むさまざまな領域でイギリス帝国の文化ヘゲモニーを揺るがすようになった。ドイツの形而上学は1890年代以降の日本哲学の主流になった。キリスト教、仏教、儒教は進化する物質的宇宙観との対話の中から人間の生の目的を改めて問うようになった。スペンサーの学説を省察するこれらの理論は、20世紀初めに日本に滞在した章炳麟がそこで受容した東洋・西洋の学術思想を構成している。近代中国思想の誕生において、スペンサーの学説やそれに対する知的反応がグローバルに流通した構図は無視できないものである。

[登壇者紹介]

◇ヤナ・ロスカ (Jana S. Rošker)

リュブリャナ大学 (スロベニア) アジア研究学部教授。博士 (中国学、ウィーン大学)。スロベニアで最初の漢学者であり、リュブリャナ大学アジア研究学部の共同創設者かつ学部長を長く務める。中国と台湾の複数の大学や研究期間で十年以上滞在した経験を持つ。主要関心領域は中国認識学、文化横断哲学の方法論、(ポスト)比較哲学、近現代中国哲学。著書は20冊以上、論文や分担執筆は200本を超える。*Asian Studies* (<https://journals.uni-lj.si/as>) 編集長、国際中国哲学学会 (ISCP) 会長、ヨーロッパ中国哲学学会創設者、初代会長、名誉会員。

◇楊 儒賓 (Yang Rur-bin)

国立清華大学哲学研究所及び通識教育センター兼任講座教授。国立台湾大学中国文学博士。主な研究分野は先秦哲学、宋明理学、東アジア儒学など。著書に『儒家身体観』、『1949 礼賛』、『儒門内の莊子』、『五行原論：先秦思想的太初存有論』、『道家與古之道術』、『原儒—從帝堯到孔子』、『多少蓬萊旧事』、『思考中 華民国』など。現在は「第三系理学」概念の発展に取り組んでいるほか、清華大学文物館のキュレーションならびにコレクションに関する方針策定に従事している。

◇橋本 悟 (はしもと・さとる)

ジョンズ・ホプキンス大学比較思想文学学科助教授。専門は東アジアを中心とした比較文学・思想史。著書に *Afterlives of Letters: The Transnational Origins of Modern Literature in China, Japan, and Korea* (コロンビア大学出版局、2023年)。

◇魏 月萍 (Ngoi Guat Peng)

マレーシアスルタン・イドリス教育大学中文系准教授。シンガポール国立大学博士。シンガポール南洋理工大學中文大學を経て現職。『依大中文與教育学刊』編集長。研究関心分野は、中国思想史、マレーシア・シンガポール文学・歴史、インターアジア華文知識生産。主要な著書に『君師道合：晚明儒者の三教合一論述』(2016年)、『馬華文学批評大系：魏月萍』(2019年)、『東北亜與東南亜的儒学建構與実践』(朴素晶との共編、2017年)、『重返馬來亞：政治與歴史思想』(蘇穎欣との共編、2017年)、*Revisiting Malaya: Uncovering Historical and Political Thoughts in Nusantara* (2020)、『亜際南方：馬華文学與文化論集』(張錦忠との共編、2022年)。

◇彭 春凌 (Peng Chunling)

中国人民大学清史研究所教授。博士(文学、北京大学)。主な研究分野は近代中国思想史、グローバル思想史、近代中英日三言語圏思想文化交流。単著に『原道：章太炎与両洋三語的世界(1851-1911)』(2024年)、『章太炎訳「斯賓塞文集」研究、重訳及校注』(2021年)、『儒学轉型与文化新命—以康有為、章太炎為中心(1898-1927)』(2014年)。『歴史研究』、『近代史研究』など国内外の学術雑誌掲載の論文数十本。第10回中国社会科学院優秀科研成果賞、第8回「胡繩青年學術賞」ノミネート、第2回新史学青年著作賞などを受賞。

◇志野 好伸 (しの・よしのぶ)

明治大学文学部教授。専門は中国哲学、中国哲学史。東京大学大学院人文社会系研究科で博士号を取得。共著に『いま、哲学がはじまる。—明大文学部からの挑戦』(2018)、『聖と狂：聖人・真人・狂者』(2016)。論文に「張東蓀にとっての中国哲学」(『明治大学文学部哲学専攻論集』第4号、2022年)など、共訳書にフランソワ・ジュリアン『道徳を基礎づける—孟子 vs. カント、ルソー、ニーチェ』(2017改訂版)、アンヌ・チャン著『中国思想史』(2010)などがある。

◇王 欽 (Wang Qin)

東京大学大学院総合文化研究科准教授。研究領域は中国近現代文学と批評理論。単著に『魯迅を読もう』、*Configurations of the Individual in Modern Chinese Literature* など。中国語への訳著に柄谷行人『探求』、ジャック・デリダ『死を与える』など。

◇石井 剛 (いしい・つよし)

東京大学大学院総合文化研究科教授。東京大学東アジア藝文書院院長。中国近現代哲学・思想史。単著に『齊物的哲学』(中国語)、『戴震と中国近代哲学』など。